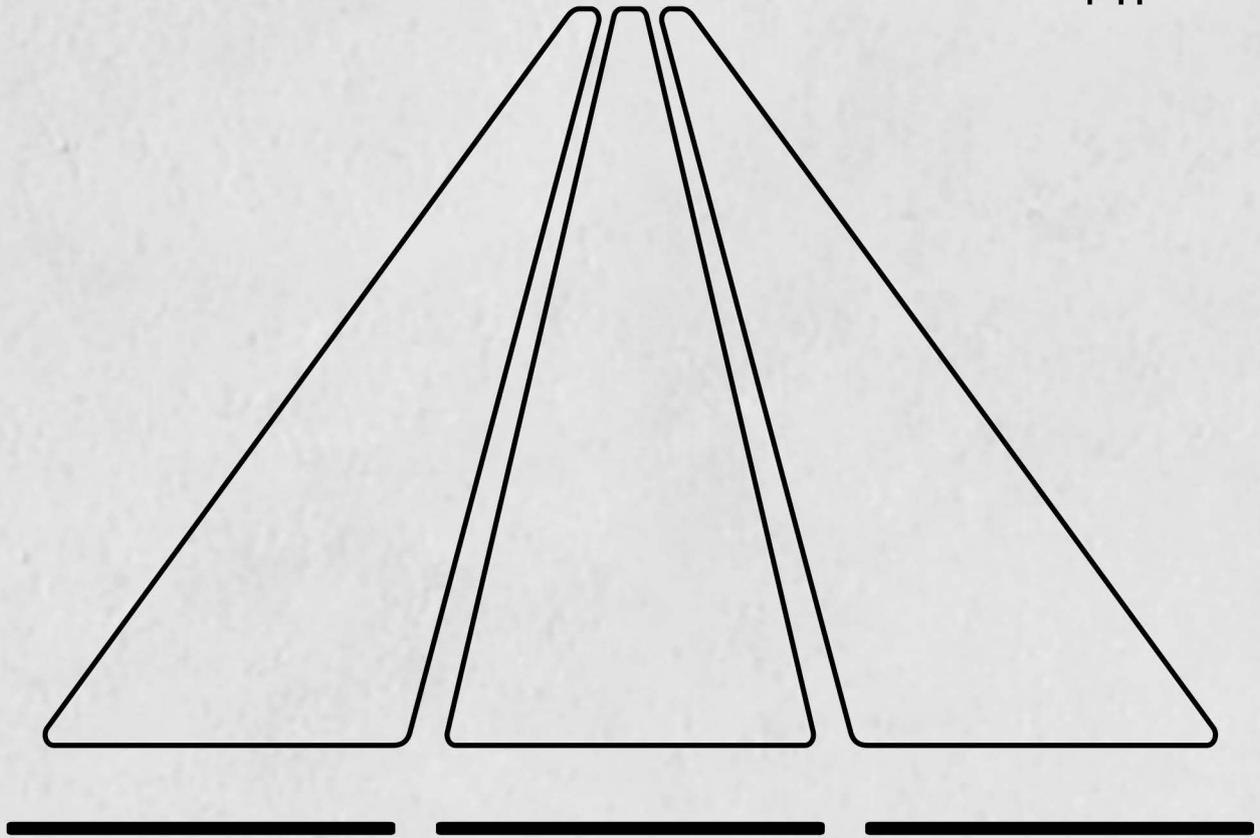


10  
TH



narahamirai

一般社団法人ならはみらい10周年記念誌

10

SINCE 2014



一般社団法人ならはみらいは、2024年に設立10周年を迎えました。この記念すべき10年という節目の年を迎えることができましたのも、様々な形で支えてくださった多くのみなさま方のご尽力の賜物であり、厚く御礼申し上げます。

当法人は、震災後の新たなまちづくりを担う復興まちづくり会社として2014年6月30日に設立されました。設立当時は檜葉町の避難指示が解除されておらず、町内の飲料水の水質放射性モニタリング事業や家屋の除草、家財運び出しのコールセンター運営など、ふるさと檜葉で安心して生活できる環境を整備する事業からスタートしました。

その後、避難指示解除や町内居住者の増加など、まちの変化に即した事業を展開してまいりました。設立当初は常駐スタッフ5名でしたが、現在では21名まで増え、町民主体のまちづくりを実現すべく日々業務にあたっております。

スタッフ全員が同じ方向を向きながら、檜葉の未来を見据えたまちづくりを行ってまいりますので、今後とも一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

一般社団法人ならはみらい  
代表理事 大和田 賢司

## 4つの時期

法人設立から現在までの10年を4つの時代に分けてみました。

法人設立、商業・交流施設の運営スタート、  
移住定住促進事業本格開始を時代の区切りとしました。

1

### 立ち上げ期

学識経験者や地元商工業者が中心となり策定した「檜葉町復興計画（第一次）」で復興まちづくり会社設立が検討され、法人立ち上げに向けた協議を行った時期。

2

### 創業期

飲料水の放射線量の測定や住宅再建のためのコールセンターなど、住民が帰町するためのサポートや、帰町後のコミュニティ形成支援事業などを行った時期。

3

### 成長期

商業・交流施設等の指定管理事業がスタートし、組織が拡大。イベント開催など事業が多様化し、少しずつならはみらいの名が浸透してきた時期。

4

### 拡大期

移住定住促進事業が本格的にスタート。人員も増加し複数拠点に。また、「ならは百年祭」がスタートするなど、着実に町民主体のまちづくりが進んできた時期。

# 各期の主要トピック

2012 2013 2014 2015 2016 2017 2018 2019 2020 2021 2022 2023 2024

## 立ち上げ期 2012 - 2014.6

檜葉町復興計画〈第一次〉に復興まちづくり会社の設立検討が明記復興計画の会議で「町民が主体となるまちづくりを主導するまちづくり会社が必要」という議論が行われる

ならば復興会社（仮称）プロジェクトチーム立ち上げ  
学識経験者や商工業者、行政関係者等から成るプロジェクトチームが発足し、組織の大枠などを検討

檜葉町復興計画〈第二次〉の中核プロジェクトとして記載  
コンパクトタウンなどの計画とともに、法人設立が復興計画の中核プロジェクトとなる

設立準備会の開始  
法人の組織体制や担うべき役割など、法人設立の具体的な検討を行う

etc.

## 創業期 2014.6 - 2018.6

設立総会  
町民や企業、行政、町外からの支援者などをつなぐ組織として『あおぞらこども園』で設立総会を開催

なにかし隊の活動スタート  
一人ひとりがおもつ檜葉への想いを共有し、一緒に考え、なにかしよう！と、町民有志が中心となり「なにかし隊」が発足

帰町に向けたコールセンター等の業務受託  
町民の檜葉での生活再建に向けて、家屋の片付けや清掃、除草等の受付業務がスタート

檜葉町への事務所移転  
檜葉町の避難指示解除とともに公民館内に事務所を移転し、コミュニティ形成サポート等始める

檜葉町活性化協議会の設立  
町内の各種団体の情報交換を目的に活性化協議会を設立し、毎月会議を開催

etc.

## 成長期 2018.6 - 2022.4

ここなら笑店街・ならば CANvas の指定管理事業開始と大幅人員増加  
コンパクトタウン内の商業施設と交流施設の指定管理事業がスタートし、人員も大幅に増加

懇話会（現親和会）やふたばエイトの立ち上げ  
企業と地域、郡内のまちづくり会社同士の情報交換や懇親を目的に、ふたつの協議体の設立に携わる

ならば CANvas などを会場にイベントやワークショップを開催  
『笑ふるタウンならば』の活性化等を目的に、役場からの受託や自主事業として集客イベントを実施

移住定住促進事業のスタート  
町民の帰町が落ち着き、持続可能なまちづくりに向けて、移住促進と定住サポート業務がスタート

etc.

## 拡大期 2022.4 -

CODOU のオープンと大幅な人員増加  
移住定住促進やスタートアップ企業誘致を目的に、レンタルオフィス等を備えた施設をオープン

ならば百年祭のスタート  
「百年続く祭りをつくろう」という町民有志の会の立ち上げに携わり、事務局を務める

3.11 特別企画みちのうえスタート  
震災から10年を機に、これまでの思い出などを振り返り、また新たに歩き出す日にしようと、写真展示などの企画をスタート

まざらっせオープン  
地域の活動や新たな交流を受け入れ、まざりあっていく活動拠点『まざらっせ』の運営がスタート。町民の趣味やサークル活動が盛んに行われる場所となっている

etc.

[ topics ]

# 立ち上げ期

2012 - 2014.6

2012年4月に策定された檜葉町復興計画〈第一次〉において復興まちづくり会社の設立が検討されました。がれき撤去や住宅の片付け・修繕、防犯警備といった復旧・復興関連事業を効果的・効率的に推進するための受け皿となることが期待されていました。また、帰町時には買い物など住民に生活サービスを提供し、本格的復興期には“新生ならば”づくりの推進役となる組織に成長していくことを目指しました。「公共性」「事業性」「地域密着性」「時限性」「自立性」を備え、中長期的には既存組織との発展的改組も想定されていました。

2012	4月	檜葉町復興計画〈第一次〉に復興まちづくり会社の設立検討が明記
	11月	「ならば復興会社（仮称）プロジェクトチーム」発足
	11月22日	第1回PT会議
2013	1月	第2回PT会議
	3月	第3回PT会議
	5月24日	檜葉町復興計画〈第二次〉に中核プロジェクトとして記載
2014	2月5日	第1回設立準備会
	5月23日	第2回設立準備会
	6月16日	第3回設立準備会



最初に事務所が置かれたいわき明星大学  
(現在は医療創生大学)



12名から成る設立準備会

2012.4

## ① 復興計画〈第一次〉に復興まちづくり会社の設立検討が明記

復興計画の主要施策のひとつとして、復興まちづくり会社の設立を検討。増大する復興需要への受け皿となる組織づくりや帰町した住民の生きがいがづくり、行政と町民が一体となるためのサポートを行うことを法人の基本的要素としていました。また、町内の環境整備や帰町時期、本格復興時期といったように、檜葉の復興のフェーズに合わせて組織の役割や事業計画を変化させていくことを期待されていました。



2012.11 ~ 2013.3

## ② ならば復興会社（仮称）プロジェクトチーム立ち上げ

ならば復興会社の設立を推進するため、まちづくり会社「ならば復興会社（仮称）」プロジェクトチームが発足されました。学識経験者や国や県の公共団体、地元商工業者など14名で組織され、プロジェクトリーダーは当時の檜葉町建設業協同組合専務理事の加藤大蔵氏が務めました。復興業務の司令塔的な役割を担い、町の既存団体・組合、NPO等の上位に位置し、復興業務の一元管理、情報の共有化や提供、地元ニーズの把握、各種申請・手続き等の支援、業務の団体・組合等への効果的な割り振りなど、行政のサポート役を果たすことを想定していました。

2014.2 ~ 2014.6

## ③ 設立準備会の始動

設立に向けた動きを本格的に進めるため、ならば復興まちづくり会社（仮称）設立準備会が発足されました。12名の委員により、会社の基本的方向性や組織形態、資金調達法といった、より具体的な議論がなされました。

[ interview ]

2012 - 2014.6

## 檜葉町の「みらい」を灯すため きずな・安心・活力を柱に据える

3.11 直下の檜葉町は、前代未聞の混乱期を迎えます。避難によって町民が散り散りとなった町を、もう一度蘇らせた。そのためには町民の縁をつなぎ直し、「みらい」に明かりを灯す存在が必要でした。ならばみらい設立までの険しい道を歩んだ4名に、当時の話を伺いました。



### 近藤 邦彦

元檜葉町復興推進委員長※  
元理事 (設立～2022.6)

### 渡邊 清

元檜葉町復興推進委員※  
元代表理事 (設立～2024.6)

### 坂本 裕

元檜葉町役場復興推進課担当職員  
現在は檜葉町振興公社

### 猪狩 充弘

元檜葉町役場復興推進課課長  
事務局長 (2024.4～)

※檜葉町復興推進委員は、ならばみらい設立のきっかけとなる議論を行った復興計画の策定委員会メンバー



## 復興計画〈第一次〉にて示された まちづくり組織の必要性

### ——震災後、檜葉町はどのような状態でしたか？

**猪狩** 檜葉町は震災の翌朝、町独自の判断で全町避難を決定しました。早期の判断により、住民のおよそ7割に当たる5,600人をいわき市内の学校に集約することができたのです。学校からはじまった避難生活は、次に二次避難として旅館やホテル、そして借上住宅（民営アパート）や仮設住宅へ移りました。誰もが2、3日で帰れると思っていた避難は、長期化の兆しを見せ始めると、当然不安が強くなります。町としての今後の方向性を示すことが求められたのです。

### ——それで復興計画〈第一次〉の策定委員会が設置されたのですか。

**渡邊** 町が受けたダメージは甚大で、行政職員が不眠不休で対応していても、とても手が回らない状況でした。何とか行政の仕事を助けなければという気持ちが強かったです。

**猪狩** 檜葉町復興計画検討委員会では、平成23年8月に行った町民アンケートを元に、議論を重ねました。そして翌年の春には復興計画〈第一次〉が示されたのです。計画には土地利用や復興の取り組み

を支える仕組みとして、コンパクトタウンの形成と、まちづくりを担う組織の必要性が盛り込まれました。

### ——なぜ、行政とは異なる組織をつくる結論に至ったのでしょうか？

**猪狩** 当時の行政は地震・津波で被災したインフラの復旧や新たな生活インフラの整備など、ハード面の復興を中心に担っていました。そして、ふたつの限界を迎えます。ひとつ目は、財源の自由度。公金は、使用用途が限定されており、地域ニーズに沿った柔軟な使い方に制限があります。ふたつ目は、人的リソース量の限界。当時の町役場の職員は100人程で、町外からの応援職員や支援者の助けを加えても、こなせる仕事量に限界がありました。

**近藤** 一方で住民アンケートの結果は、コミュニティ再生の重要性を示していました。つまり、町民同士の交流を復活させ、町民が“帰ろう”と思えるきっかけをつくり出せる役割をまちづくり会社が担うことで、行政が行うハード整備と合わせたコンパクトを町民に与えられると期待されていたのです。

### ——そこで、組織設立へ動き出すために、みなさんに白羽の矢が立ったのですか。

「具体的には、何をすべきか？」 第一歩目から迷い道の連続

——計画当初、まちづくり組織が担う仕事とは、どのようなものがあると想定していたのでしょうか？

**猪狩** 既存の民間企業の業務を圧迫する存在にならない配慮も必要でしたね。また、復興需要で発生する仕事を地元企業に分配する機関にするという案もありました。今の業態とはだいぶ異なりますよね。

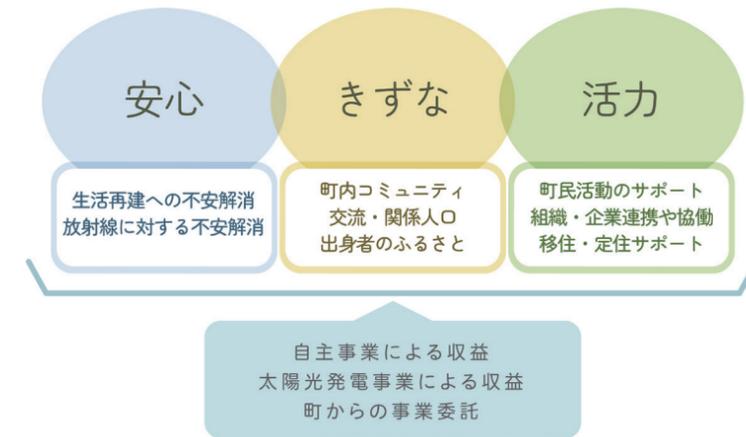
**坂本** ソフト部分の復興を担う……それ以上の詳しい中身は、誰も予想がついていませんでした。「町のソフト面の復興を担います」「行政にも民間にもできないことをやります」という概念は共感されるものでした。しかし、組織設立の発端となった復興計画は、町の復興に関わるありとあらゆる事柄を広く書いています。すべて大事なことだけれども、すべてを実現するのは難しいので、まちづくり会社が何を取り扱うか、まちづくり会社として活動の指針と範囲を示す“柱”をどのように設定するべきか。ひどく頭を悩ませました。

——基本理念が定まるまで、どれくらいの時間を要したのでしょうか？

**猪狩** ならばみらいの設立趣意書は、決して長い文章ではありません。けれども、書くために2か月ほどの時間を要しました。それだけメッセージと想いを込めたものです。ヒントになりそうな場所へ、視察にも行きましたね。

**坂本** 特に心に残っているのは、宮城大学を視察したときに教授にかけてもらった言葉です。「何をやるにしても住民の気持ちが離れたら復興は進まない」と言われ、ハッとしました。ならばみらいの基本理念に、きずなというワードを加えるヒントになりました。

——そこから、ならばみらいの3本の柱、「きずな・安心・活力」が生まれたのですね。



**坂本** 3本の柱に加えて、触媒的な役割というフレーズにもこだわりました。触媒とは、自身は変わらないけど、周囲の物質同士の反応を促す役割をするものです。人と人、事業と事業をつなぎ、より良い未来の姿を目指すという、ならばみらいの役割を表しています。

**渡邊** ならばみらいという名前にも、復興への願いを込めました。

——事業指針の柱が決まったあとは、より詳しい事業内容を検討したのでしょうか？

**渡邊** 議論を重ねましたが、たどり着いた結論は“やれることから何でもやる”ことしか、復興の突破口になりえないという悟りでした。

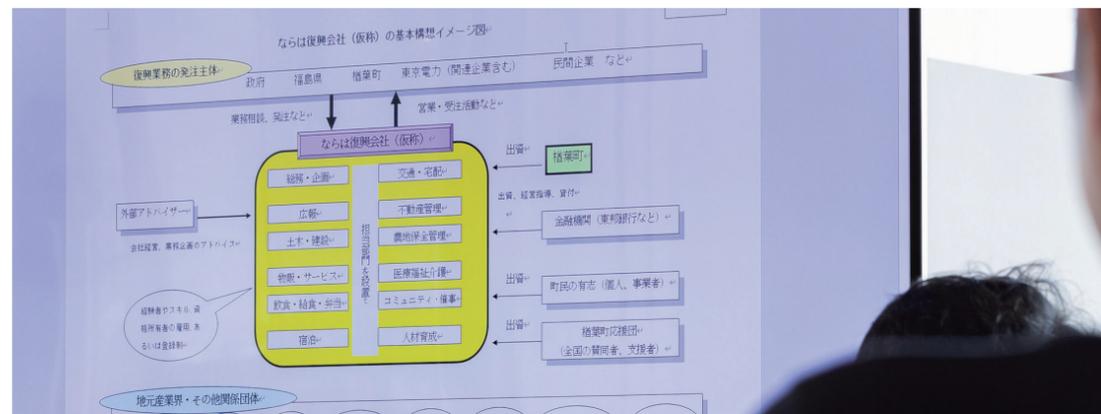
**近藤** 明確な行動指針を先につくるよりも、行動をしながら改善していくというスタイルで進んでいました。平時であれば、問題を事前に想定して計画を立てることがセオリーでしょう。しかし、当時の楢葉町は復興状況が目まぐるしく変化していたこともあり、求められる役割やニーズが刻一刻と変化していました。そうした際に、受け皿となる組織が

あるかないかで対応は大きく変わり、まち全体の進路はかなり変わってきます。町民が相談できる窓口になり、解決への突破口を生み出せる組織となることを信じていました。

——自走できる組織になるために、何が必要だったのでしょうか？

**猪狩** 重要視したのが、財源です。行政に負担をかけず、まちに必要な新しい事業を考えながら自走し続けるためには、安定して得られる財源が重要でした。そこで取り組んだのが、メガソーラー発電事業を行う会社に出資をして、配当金を活動資金とする構想です。

**渡邊** 確かに行政からのアウトソーシングを中心とした予算計画もありました。しかし復興財源もいつかはなくなるため、行政からの資金ばかりに頼っているのは、その体制が長く続く保証はありません。自らの裁量で、必要な行動や人材を判断し、テンポよく活動にまい進していくためにも、自己財源は重要です。自身の財布の心配をしているようでは、理念を実現するのは難しくなってしまいますから。

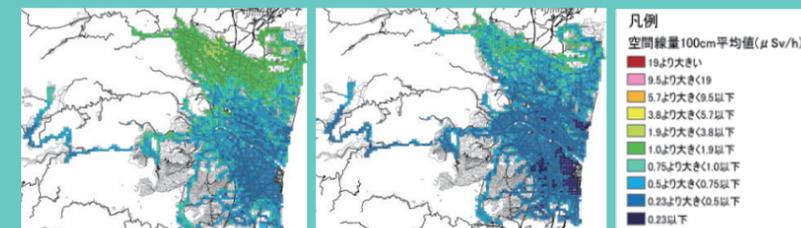


2012年8月10日  
警戒区域から避難指示解除準備区域に再編

日中の立ち入りが可能に  
(宿泊は不可)



除染廃棄物仮置場



除染前

除染後

2013年度末  
町内の住宅圏の除染が完了

「一刻も早く走り出さねば」限られた時間のなかで自走体制を整えた

坂本 それと、行政と発注元・発注先の関係になってしまうのも、望ましくないだろうと話しましたね。発注の仕様に縛られ、自由な活動ができなくなってしまいます。「言われたことのみをやっていたらいいや」と満足してしまうことも懸念していました。

——自主財源の獲得が必須だったのですね。

坂本 メガソーラー発電事業の配当金という、いわゆる投資所得で原資を得られるシステムにしたのがミソでした。資金調達のための仕事にとらわれる必要がありません。組織の人的リソースの100%を、まちの復興のために注ぎ込めることは大きいです。

——ならばみらいのひとつの特長に、町民主体の活動を促す理念があると思いますが、こういった趣旨だったのですか？

坂本 町民それぞれが別の避難先や異なる被災状況下に置かれたことで、自分達のまちをどうしていきたいか気持ちをそろえて考える重要性に気づきました。



「町民主体」のキーワードのもと、町民自らがまちづくりについて本気で考えるようになってほしい。まちづくり会社に愛着をもち、一度失ったふるさとを一緒にどうにかするためのパートナーとして見てほしい」という檜葉町民への期待と願いが込められています。町民主体という言葉は行政ではよく使いますが、これほどまでに気持ちの入った“町民主体”というフレーズは他にはありません。

渡邊 「ならば百年祭」なども、町民主体の風土が根付いた表れのひとつです。行政の主導ではなく、若者たちが町民と手と手を取り合って開催しています。

——そのほか、設立までに特に苦労したことはありますか？

坂本 人材探しですね。運営には当然、スタッフが必要です。事業計画が明確化されていなかったのも、私どもも「何をやるのかもわからない会社に身を預けてくれ」とは言いづらかったです。業務内容ではなく、想いに賛同してくれる人が応募してくれた状況でした。



渡邊 加えて、まちに思い入れがないと、仕事も上辺だけになってしまい、熱が入らなくなってしまいます。地域のことを心の底から考えられないと難しい業務なので、今も想いの強い職員が集まっています。

近藤 行政の出資が入るような組織は全国を見ても、上手くいかないケースが多く見受けられます。その点ならばみらいは現在の状態で10年を迎えられました。発起人の立場からすると、職員一人ひとりが本当によくやってくれていると感じます。

——これからのならばみらいに期待していることはありますか？

猪狩 ならばみらいは現在、行政から頼られるたのもし組織になれたと思います。それに慢心せず、常に町民との距離を近く保ち、より多くの町民から頼られることを目指し続ける組織であってほしいです。

渡邊 若者が多く暮らす檜葉町になれるよう、町独自の暮らし方や文化の醸成に力を入れてもらえたらと思います。加えて町外から人が訪れたいくなるような、町に魅力をプラスする活動にも力を入れてもらえたらいいですね。

近藤 檜葉町は、J ヴィレッジやスカイアリーナなどの魅力的なスポーツ施設、魅力ある人や制度などのソフト面も有しています。あとはアート文化などをもち込んでも、おもしろいかもかもしれませんね。浜通り全体が一致結束して地域を盛り上げる流れを、檜葉町がリードしてつくっても良いでしょう。地域づくりの新しいアイデアを町に投げかける役割を担ってくれることを、ならばみらいに期待して10年20年50年と続いてほしいです。

坂本 これからも、触媒としての役割を努め、町民と共に歩み続ける組織であってほしいです。

(敬称略)



触媒としての役割を努め、町と共に歩み続けてほしい



2013年4月3日  
電子回覧板開始



2013年5月26日  
水稲実証栽培開始



2013年11月26日  
除染検証委員会の設置



2014年4月15日  
鮭稚魚放流



2014年5月29日  
「帰町の判断」表明



2014年6月1日  
JR常磐線 広野駅 - 竜田駅間の運転再開

# 2

## 創業期

2014.6 - 2018.6

復興まちづくり会社として設立されたならはみらい。事務局4名と常勤理事1名の計5名体制で、いわき明星大学（現医療創生大学）の学生会館の一室に事務所を構えました。備品もマニュアルも何もない状態で、手探りでスタート。町もまだまだ混乱している中、生活再建に向けたコールセンターといった町内で安心して暮らすための事業や、集いの場創出など帰町後のコミュニティ形成サポートを中心に実施しました。

2014年 6月30日	設立総会／理事会
7月4日	アメーバブログ開設
7月7日	ホームページ開設
8月5日	理事会
10月9日	理事会
11月8日	まちめぐりバスツアー
11月14日	まちめぐりバスツアー
11月18～20日	町民号（伊勢志摩と富士山周辺）
12月24日	ならは応援団 ありがとうプロジェクト
2015年 1月1日	季刊誌第1号発行
1月23日	理事会
3月21日	檜葉ならでは祭 イベントに合わせたまちめぐりバスツアー
5月17日	結のころプロジェクト 新潟県小千谷市塩谷集落×高久第8仮設住宅交流会
6月26日	社員総会／理事会
7月8日	花いっぱい運動（東邦銀行前花壇）
7月11日	なにかし隊顔合わせ会
7月25日	まちめぐりバスツアー
8月1日	季刊誌第2号発行
8月31日～9月6日	「ならは31人の“生”の物語 2015」立命館大学と作成
9月5日	防災無線にて朝の放送開始
10月10日	ふたばワールド なにかし隊の出演
11月5日	理事会
11月27日	まちめぐりバスツアー

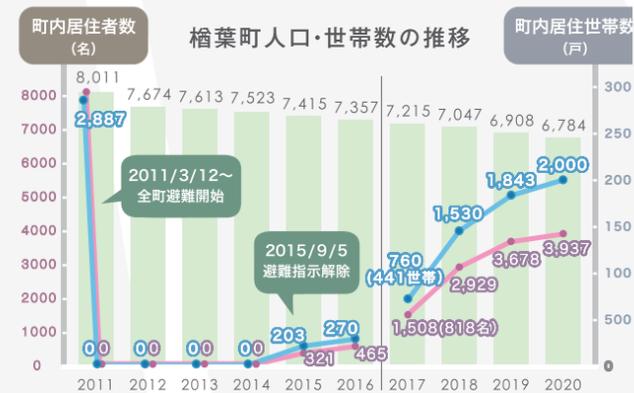


設立当初の事務所の様子

2016年 1月1日	季刊誌第3号発行	2017年 1月27日	理事会
1月17日	なにかし隊 もちつき交流会	2月22日	首都圏学生向けスタディツアー
2月20日	まちめぐりバスツアー	3月27日	檜葉町活性化協議会設立
3月4日	まちめぐりバスツアー	6月22日	社員総会／理事会
6月24日	社員総会／理事会		
11月1～3日	町民号（白川郷、兼六園、善光寺）	2018年 2月2日	理事会



設立総会の様子



< 2011年～2016年の集計方法 >  
震災当時、檜葉町に住民票があった者の帰還状況を示す。  
(防犯パトロール隊及び町内居住者確認表において、4日以上滞っていた数値)

< 2017年からの集計方法 >  
町内に居住している町民の数を示す。  
(転入者、転出者数の変動も含めた数値)

### 創業期 事業一覧

住宅衛生環境向上推進事業 ならは応援団事業 まちめぐりバスツアー事業 花とみどりプロジェクト事業 町民号運営事業  
放射線測定器の回収・発送業務 檜葉ならでは祭 2015 ミニ同窓会等業務 未来へつなぐ心の輪プロジェクト事業 飲料水供給  
施設水質放射性モニタリング事業

住宅マッチングサポート事業 被災者生活支援事業（仮設住宅入居高齢者等見守り支援事業） なにかし隊事業 ならはふるさと  
案内人事業 空き家・空き地バンク事業 天神岬公園内イルミネーション交流事業 交流人口拡大事業 若者と進める景観植物  
を活用した耕田の活性化事業（環境省花植え） 檜葉町活性化協議会 藍染め事業

[ topics ]

2015.7.11 ~

① なにかし隊立ち上げ

「ふるさと楡葉のためになにかしたい!」という想いをもちた町民が集まり、自分達でアイデアを出し合いながら活動をしている任意団体の事務局を務めていました。かかし製作や朝のラジオ体操の町内放送など、隊員一人ひとりが、まちのために必要なことを話し合っていました。



2014 ~ 2020

② 住宅衛生環境向上推進コールセンター運營業務

帰町に必要な住環境整備のためのコールセンター運營業務を楡葉町より受託。屋内清掃やリフォーム業者マッチングのためのコールセンターを通じて、帰町のためのサポート業務を行いました。



2014 ~ 2017

③ 飲料水供給施設水質放射性モニタリング事業

町内の飲料水を供給する施設の放射線量モニタリング事業を受託。水道水の放射線量に関する不安を耳にする中で、安心して暮らせるための業務を担いました。



2015 ~ 2018.3

④ 仮設住宅入居高齢者等見守り支援事業

いわき市と会津美里町にあった楡葉町の仮設住宅に連絡員を配置し、個別訪問や施設管理を行い、高齢者等の見守りを行いました。



2017.3.27 ~

⑤ 楡葉町活性化協議会設立

町内の各種団体や各拠点の役割を明確にし、連携体制を強化。復興を担う力を集中化させ、総合的に町の魅力を取り戻すことを目的に、楡葉町活性化協議会が立ち上がりました。



2016 ~

⑥ ならはふるさと案内人事業

震災のことを知りたい、復興の歩みを知りたいという企業や大学などを対象に、町内の視察ガイドや座学での語り部を実施。町民がガイド・語り部となり、自分達の経験や生まれ育ったまちのことを説明しました。



2016 ~ 2021.8

⑦ みらいハウス運営

町外から訪れた学生などが町内で活動する際の宿泊拠点となった『みらいハウス』。近隣の松館地区の方々と利用者の交流も生まれました。オーナーの帰町という、立ち上げ当初の理想としていた形で運営を終了しました。



[ interview ]  
2014.6 - 2018.6

## 「ならばみらいとして何をすべきか」 0から1をつくるための 答えを探した創業期

檜葉町の復興のために、何をすべきか。“きずな・安心・活力”を柱として、走りながら考えることを求められた創業期。ならばみらいの為すべきことを手探りで求める日々を支えたのは、職員の“本気の熱意”でした。創業期を駆け抜けた当時の職員4名にお話を伺いました。



古市 壽正

元事務局長 (設立～2016.3)

歳森 健司

元事務局次長 (設立～2018.3)

新田 勇太

元事務局スタッフ (設立～2017.3)  
現在は檜葉町役場農林水産課

山本 尚樹

元事務局スタッフ (設立～2017.6)  
※東京電力からの派遣職員

### 「檜葉町の力になりたい」志をもったメンバーが集結

——みなさんがならばみらいと関わり始めた時のことを教えてください。

**古市** ならばみらいの設立総会が開催されたのは2014年6月30日ですが、その準備を進めるために、先行して動いてくれていたのが山本さんと新田さんです。

**山本** そうですね。私たちが働き始めたのは確か、2014年5月だったと思います。私は東京電力からの派遣社員としてメンバーに加えてもらいました。社内で派遣社員として声がかかったときは、震災直後からJヴィレッジに応援で来ていたこともあり、意欲に燃えていました。

**新田** 私は震災前までは浪江町で歯科技工士をしていましたが、震災後は会津に避難し、行政の緊急雇用枠で働いていました。檜葉町に早く戻りたいという思いを抱えていたので、いわき市の出張所でまちづくり会社が始動するから働かないかと声をかけてもらった時は、ぜひともと答えましたね。

——事務所を立ち上げるところからのスタートだったのですね。

**新田** 当時は、いわき明星大学（現在は医療創生大学）に、檜葉町役場の出張所がありました。その

関係で、ならばみらいの事務所も大学会館3階に設置されていたのです。ならばみらいが入る前は役場の仮眠室となっていたため、ベッドを運び出すことからの仕事でした。事務所も備品もマニュアルも、本当に何も無い状態からのスタートでした。

**山本** 翌月の設立総会に間に合うように、資料を準備したり、当日の進行の手配をしたりと、あの時はふたりで必死に準備を進めました。

——古市さんと歳森さんはいかがですか。

**古市** 私は震災後に町役場を定年退職していたのですが、檜葉町の力になれるのならと、事務局長の仕事を引き受けることにしました。当時はまだ町民がみな避難しており、町役場がありとあらゆる業務を担っていた状態です。まちづくり会社で仕事を少しでも引き受けて、行政の負担軽減に貢献したいとの思いでした。

**歳森** 私は23年勤めていた首都圏の企業を退職して、檜葉町に来ました。求人募集を見つけた時、ちょうど私は、自分の在り方を見つめ直そうとしていた時期でした。培ってきたキャリアを人のために役立てたい、それなら福島県の復興に役立てよう。そこで見つけたならばみらいの職員募集が、自身のキャリアや思いとマッチングしたのです。

何をすべきか、答えが見つかるまで走り続ける日々

町民に少しずつ、ならばみらいの存在が浸透し始めた

—そして2014年6月の設立総会を迎え、ならばみらいが始動したのですね。始めはどのような仕事をしていましたか？

**古市** 初年度は、“何をすべきか”を模索すると同時に、行政から求められたことを粛々と進めていましたね。

**歳森** 設立時に決まっていたことは、設立趣意書にある“檜葉町の再生のために新たなムーブメントを起こしていく触媒的な役割を果たし、町民や地元企業が行政と協働して行うまちづくりを主導する”という方針のみ。目的と役割を、具体的にどのように成し遂げていくのか。私たちも含め、誰にもわかりません。そのため、走りながら考えるほかありませんでした。



—当時は行政から求められた仕事に応えることが主だったのですね。

**古市** 町の行政からだけでなく、町外の方々からも、やってほしいことのリクエストやオファーが舞い込んでくるがありました。

**山本** 当時は混乱していた時期です。檜葉町や町民のニーズと、町外からの「ぜひ支援をしたい」という声の両者をうまくマッチングさせるために、「ならば応援団事業」を立ち上げました。

—ならばみらいの方向性が定まるきっかけとなった事業はありましたか？

**古市** 一番のきっかけは「町民号」の開催です。



町民号とは、町民を対象にした団体旅行で、震災前から継続的に開催されていました。「町民同士のつながりを取り戻すためにも、ぜひ町民号の開催を取り仕切ってほしい」と町役場からオーダーをもらい、2014年に伊勢志摩や富士山の2泊3日のツアーを企画しました。その結果、大型バスを複数台チャーターするほどの参加者が集まりましたね。

**新田** 町民号の行程の中には、職員の人脈とアイデアを活用して、歌手による歌謡ショーや各種出し物なども最大限に盛り込みました。

**歳森** 心に残っているのは、2014年の町民号の際に発表した「檜葉からの手紙」というスライドショーです。詩の朗読と合わせて、震災前後の檜葉町の写真を映し出すものです。そこに込めた“檜葉町は



町民の帰りを待っている”というメッセージは、多くの町民の方に伝わったのではないかと思います。

**山本** 翌年以降も、ならばみらいが町民号の運営を担わせてもらいました。この町民号によって、ならばみらいの存在が町民の方に少しずつ浸透していったのではないのでしょうか。

—ならばみらいで事業を企画する際、何を参考にしましたか？

**古市** 行政から伝えられるニーズに加えて、仮設住宅を個別に訪問する連絡員さんが集めた“町民の声”も参考にしていました。

**歳森** 当時の連絡員さんは、毎日町民のお困りごと



誰もが熱意をもって、だから本気で意見をぶつけ合った



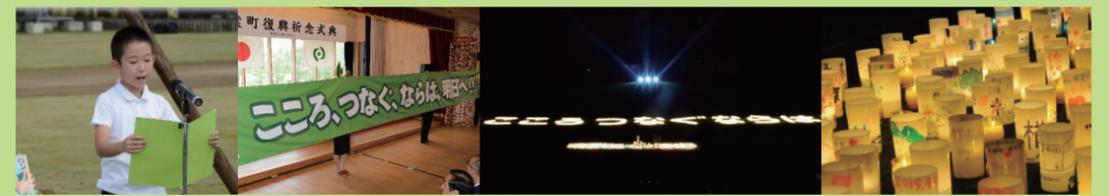
2014年7月31日  
仮設店舗『ここなら商店街』オープン



2014年11月18日～20日  
町民号



2015年4月6日  
準備宿泊開始



2015年9月5日 檜葉町の避難指示が解除

## 職員それぞれがキャリアを生かし、組織を発展へと導いた

の聞き役をつとめていらっしゃいました。ならば  
みらいにとっても、連絡員さんの存在は大変大きな  
ものでしたね。

——行政の声と、町民の声。それぞれを基に、ならば  
みらいの方針を検討したのですね。

**古市** そうですね。職員のディスカッションは白熱  
しました。

**歳森** さまざまな背景をもつ職員が集まったからこ  
そ、多角的な意見や考え方が生まれました。行政が  
求める役割を深めていくべきか、新しいものをどん  
どん提案していくべきか、ときには意見が衝突する  
こともありましたよ。ただ、どの職員も“檜葉町を  
より良くしたい”と真剣でした。だからこそ、それ  
ぞれの考え方を本気でぶつけること、手と手を取り  
合って進めることができたのだと思います。今思い  
返すと、楽しい思い出ばかりに感じるのは、職場の  
人間関係に恵まれていた証です。

**山本** 町民の方が檜葉町で安心して暮らせるよう  
にしよう。まだ帰還できない町民の方も、檜葉町との  
関係性を維持できるようにしよう。職員全員、目指  
していたゴールは同じでした。

——大変だった事業、ご苦労された思い出はありま  
すか？

**新田** 避難指示解除になった年で、戻ってきた方や  
一時帰宅した方の癒しになればと、国道沿いに花を  
植える事業を行ったのですが……あの年はカンカン  
照りが続き、みるみる花たちが元気を失ってしま  
いました。そのため職員が、重いポリタンクを抱えて  
水やりを奔走した思い出があります。今となっては  
笑い話ですが、当時はかなり大変でしたね（笑）。

**山本** 当時はやったことがないことでも、何でも  
やっていました。私も派遣前は配電線の設計やシス  
テム開発などの技術職だった関係もあり、ならば  
みらいで経理事務を行う際には、歳森さんにすごく  
助けてもらいましたね。その時々に必要なとされる  
キャリアやスキルをもった人材が、バランスよく  
集まっていたのが素晴らしいです。

**古市** 当時の山本さんは、ならばみらいの業務をこ  
なしつつ、メガソーラー発電の新しい法人設立の  
準備にも尽力いただきました。職員それぞれの力、  
そして周囲の助けがなければ、成し遂げられなかつ  
たことが多々あります。

——現在のならばみらいを見て、当時の活動が実を  
結んだと感じる部分はありますか？

**新田** 何かひとつ大きなことを成し遂げたというよ  
りは、その時々求められることに答え続けてきた  
から、今の姿があるのだらうと思います。当時は



学生として町に関わってくれた方が、今はならばみ  
らいの職員となってまちづくりに取り組んでいる姿  
を見ると、変わらずに受け皿としてあり続けている  
組織の意義を感じて、感慨深いです。

**山本** この対談のために、久しぶりに檜葉町を訪  
れました。町民の方が戻り、住宅に暮らしの温もりが  
あり、田んぼに稲が色づいている姿を見て、ならば  
みらいが活動を続けてきた成果を感じました。まち  
づくりと聞くとハードの部分が注目されがちです  
が、ならばみらいはソフトの部分、心と心をつなぐ  
役割を果たしている点が素晴らしいと感じます。

——これからのならばみらいに、期待していること  
を教えてください。

**歳森** 立ち上げから今まで、歴代の職員が、“その  
時代のならばみらい”だからできることを模索し続け  
て、今があります。今の職員、これからの職員も、  
ならばみらいの良いところは残し、何か違うなど

思うことがあれば変えていけるように果敢にチャレ  
ンジしていただきたいと思います。

**新田** きっと、ならばみらいはその時々で、自然と  
ベストな形になっているのだと思います。“きずな・  
安心・活力”の、決して変わらない柱をもちながら、  
地域の状況に柔軟に寄り添える組織であれば良いと  
思います。

**山本** 行政だけでは難しいこと、町民だけでは難し  
いことがあるかと思います。その両者の間をうまく  
縫い合わせられるように、人と人をつなぎ、仕事と  
仕事をつなぐ機能をこの先も担ってもらえたらと  
思います。これからもならばみらいを、応援し続け  
ます。

**古市** 私たちがいた時代よりもはるかに多い職員を  
抱え、活動できる組織となったことを素晴らしいと  
感じています。これからも町民との距離が一番近い  
組織であり続けてくれたらうれしいですね。

（敬称略）

町のフェーズに合わせてこれからも歩み続けてほしい



2016年8月  
ほっつあ〜れ 2016 盆楽祭開催



2016年10月  
ならば米 初出荷



2017年2月  
ふたば復興診療所オープン



2017年4月  
小・中学校が町内で再開



2017年4月  
中満南団地災害公営住宅が供用開始



2018年3月  
仮設住宅供与終了

# 3

## 成長期

2018.6 - 2022.4

『みんなの交流館 ならは CANvas』と『ここなら笑店街』がオープン。指定管理事業を受託したことで事務所を移転し、人員も大幅に増員しました。管理エリア内でイベントを行うなど、これまでと事業内容も大きく変化しました。

また、「ふたばエイト」や「立地企業親和会」といった横のつながりをつくる協議体もこの時期に相次いで発足し、まちづくり会社としてのハブ機能をより一層強化していきました。

2018年 6月28日	ここなら笑店街オープン
7月30日	みんなの交流館 ならは CANvas オープン
10月30日~11月1日	町民号 (山形、福島)
11月10日	なら SUN フェス
11月16~18日	地域づくり団体全国交流会福島大会
12月22日	ここなら笑店街中央広場イルミネーション点灯式
2019年 2月2日	復興支援員及び地域おこし協力隊 PR 事業・ブース出展
2~3月	復興創生インターンで学生3名の受け入れ
4月10日	檜葉町新たなコミュニティづくり懇話会設立
5月14日	双葉郡まちづくり会社等連絡会議 (ふたばエイト) 設立
6月25日	社員総会/理事会
6月29日	商業施設開業1周年 檜葉ファミリーフェスタ
7月1日	吉崎焼酎で乾杯
7月24~30日	交流館開館1周年イベント みんなのマルシェ
12月15日	Jヴィレッジハーフマラソンを活性化協議会で応援
2020年 1月11日	笑みふるタウン 新春イベント
4月1日	笑みふるタウン スマートコミュニティ事業開始
8月29日	笑みふるタウン 2周年感謝祭
11月7日	なら SUN フェス開催
12月12日	ここなら笑店街クリスマスナイトガーデン
2021年 1月9日	ここなら笑店街新春大抽選会
2月13日~3月14日	3.11 CANvas に描く!
3月7日	復興感謝祭 檜葉ならではの祭
3月25日	東京2020オリンピック 聖火リレー
10月1日	檜葉町観光協会の事務業務受託開始
12月7日	檜葉町立地企業親和会再編
2022年 3月4日~4月25日	3.11 特別企画 みちのうえスタート



ワークショップをもとに設計された『ならは CANvas』



趣味の教室やイベント等が行われる交流施設



スーパーや飲食店など12店舗が入る商業施設

### 成長期 事業一覧

住宅清掃費補助事業 (ハウスクリーニング) 屋内片付け・家周り除草・家周り清掃等受付業務 ならは応援団事業  
 なにかし隊事業 花とみどりプロジェクト事業 藍染め事業 町民号運営事業 ならはふるさと案内人事業 生活再建空き  
 家・空き地バンク事業 交流人口拡大事業 みらいハウス運営事業 活性化協議会運営事業 商業施設指定管理事業 共  
 用施設指定管理事業 交流施設指定管理事業 受託イベント事業 交流館ワークショップ事業 笑みふるタウン活性化事業

ならはみらい共創事業 ふるさと納税運用事業 ふたばエイト事業 檜葉町新たなコミュニティづくり懇話会事業 子育て  
 支援等プレミアム付き商品券販売事業 スマートコミュニティ事業 中学生向けメンター導入プログラム構築事業 中学生  
 キャリア教育模擬会社開発商品委託販売事業 自然・体験コンテンツ磨き上げ事業 まかない付きシェアハウス運営支援事業

[ topics ]

2018 ~

① ここなら笑店街・ならは CANvas 指定管理事業開始

スーパーや飲食店など12店舗が入った商業施設『ここなら笑店街』と、町民ワークショップで出た意見をもとに設計された交流施設『みんなの交流館ならは CANvas』の指定管理事業をスタート。町民の生活環境を整えるとともに、町内外の交流を図るために、イベントやワークショップ開催などを開始しました。



2019.5.14 ~

② ふたばエイトスタート

各町村のよりよいまちづくりを進めていこうと、双葉郡まちづくり会社等連絡会議（通称ふたばエイト）が発足し、ならはみらいもメンバーの一員となりました。双葉郡8町村のまちづくり会社等が手を取り合い情報共有し、地域活性化に資する連携を図っています。



2021.12.7 ~

③ 檜葉町立地企業親和会の再編

企業間の情報共有や親睦を深めること、まちづくり施策への参画を目的に、町内進出企業を中心とした連絡会を再編。



2019 ~

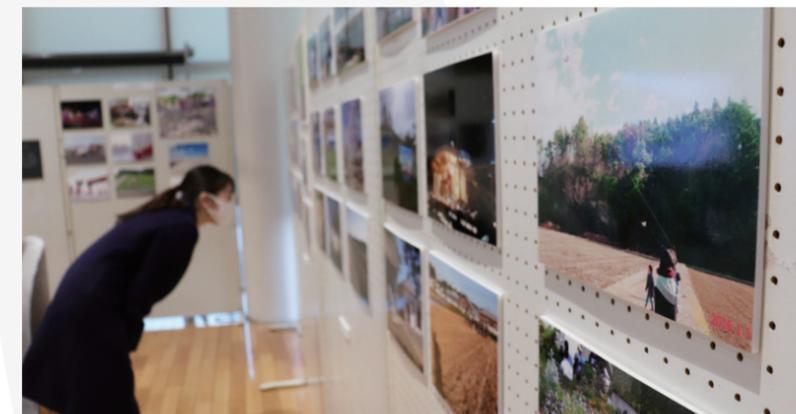
④ ふるさと納税の運用開始

檜葉町からふるさと納税事業を受託。返礼品を通して、檜葉町の魅力を町内外に発信するとともに、生産者・地域事業者の販売力・収益性強化に寄与することを目指しています。

2022.3 ~

⑤ 3.11 特別企画「みちのうえ」スタート

檜葉町、福島、日本、世界、そしてこれから生きるひとに向けてメッセージを伝え残していくアーカイブプロジェクトをスタート。地震・津波・原子力災害に伴う避難生活を経験した檜葉町として、歴史や文化、震災の記憶、それぞれの復興の歩みを伝えています。



[ interview ]  
2018.6 - 2022.4

## 指定管理事業を開始した成長期 コロナ禍という 予期せぬ困難も乗り越えた

成長期は、『ここなら笑店街』『みんなの交流館 ならは CANvas』の指定管理事業が始まり、ならはみらいの組織として成長する基盤が形成された時期です。震災復興から、町民一人ひとりが明るく暮らすためのまちづくりへ。新たな方向性を切り開くために尽力した、5名に話を伺いました。



### 西崎 芽衣

大学を休学して臨時職員 (2015.4 ~ 2016.3)  
事務局スタッフ (2017.4 ~)

### 樋田 利治

元事務局長 (2020.4 ~ 2023.3)

### 永山 光明

専務理事 (2020.6 ~)  
元事務局長 (2016.4 ~ 2020.3)

### 矢代 (牧ノ原) 沙友里

元事務局スタッフ (2016.4 ~ 2023.2)

### 石崎 芳行

顧問 (2019.4 ~)  
元東京電力職員

## ならはみらいの成長期を支えたメンバーが集結

—みなさんがならはみらいに入った経緯を教えてください。

**西崎** 私は、京都府の大学でまちづくりを学びながら、ボランティアとして避難中の町民の方と交流をしていました。大学を1年間休学してならはみらいの嘱託職員となり、大学を卒業した後に正職員となりました。檜葉の方の思いを正しく理解し、“町民主体のまちづくり”の実現に向けてできることをしたいという思いが、当時の原動力でした。

**矢代** 私は檜葉町出身で、震災当時は夢を追いかけて上京していました。檜葉町の避難指示が解除され、やりたいことの区切りもついたころ、双葉郡内で開催された「ふたばワールド」を訪れたことが帰町への後押しになりました。地元のためにスタッフとして動く同級生の懸命さを素敵だと思い、プースの運営をしていたならはみらいに興味を湧きました。

**永山** 私は町役場を定年退職した後のことを考えていた際に、ならはみらいへの再雇用の話がありました。まちづくり会社であれば、避難指示解除後の檜葉が変わっていく様子を町民に近い目線で見ることができると思い、ならはみらいの一員となりました。

**樋田** 私は先代の事務局長から、バトンを引き継ぐ役割を頼まれました。在職していた3年間はコロナ対策に追われ、またたく間に過ぎてしまいましたが、

檜葉町の未来を想い、自由な発想でまちづくりに打ち込む経験ができました。

**石崎** 私はJヴィレッジの建設当時に東京電力社員として檜葉町と縁をもち始め、福島第二原発の所長時代に町民のみなさんと仲良くなりました。終の棲家は檜葉町でと夢見ていた矢先に震災・原発事故があり、長く務めた会社のご迷惑をお詫びするため、避難所を回りました。厳しい避難生活を送っているにもかかわらず、やさしい言葉をかけてくださる町民の方がいたことは、今も忘れることができません。顧問として声をかけてくれたならはみらいにも、ご恩を返したいと強く思っています。

—成長期の大きな変化のひとつが、指定管理事業の開始だったとお聞きしています。

**永山** 町からの受託事業や、メガソーラー出資による配当金収益は、復興予算の減少や電力市場の情勢変化により変動するリスクもありますからね。人件費を安定して確保し、各職員の給与ベースアップを叶えるためにも、収入の柱の数を増やすことは必須でした。

**樋田** コロナ禍によって社会の先行きが不透明になった面でも、安定した財源を確保できる指定管理事業は大きな力になると考えました。

「未来への思いが込められた施設をいかに運営するか」  
指定管理事業がスタート

移住者と地域とがよい関係性を築ける配慮を

——指定管理事業に対する思いはどのようなものだったのでしょうか。

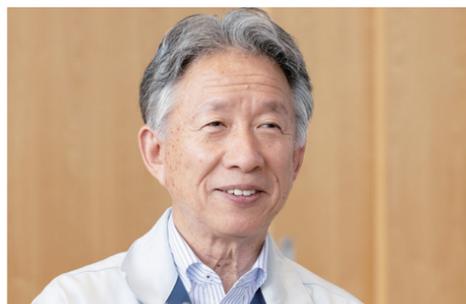
**樋田** たくさんの方が思いを込めて作り込んできた施設だからこそ、職員は誰しも、管理する責任の重さを感じていました。

**矢代** 新しいことが始まるワクワク感もありましたが、後世に残る取り組みだからこそ感じるプレッシャーもありましたね。



**樋田** 町民の帰還率が頭打ちになっている状態と、地方移住を奨励する風潮とが重なりましたからね。移住事業を始めるうえで、研修や視察も行いました。

**石崎** 研修先での一番の学びは、お節介役の重要性です。移住がうまくいっている地域では、地域を良く知る人間が、移住者にほどよくお節介を焼いていることがポイントだと知りました。それ以来、私も檜葉町のお節介おじさんのひとりになることを目指しています。



**西崎** 私は指定管理施設の中でも『みんなの交流館ならはCANvas』には強い思い入れがあります。交流館に身を置いて町民の方との関わりを大切にしながら、町民主体のまちづくりを進めたい。だからならはみらいに就職した、と言っても過言ではありません。そんな中、町民の方が自発的に、交流館で勉強する子どもたちの学習サポートを願い出てくれたときは、関わってきて本当に良かったと思いました。

——成長期は、町民の方の帰還を促す一方で、移住にも目を向け始めた時期かと思います。

**西崎** 私自身も移住者なので、町をよく知る方が、地域との接点をつくり、両者をつないでいけるといいなと感じていました。

**矢代** 近年の檜葉町では、若い町民の中からも、お節介役を買って出てくれる人が増えてきたように思います。これも町の変化のひとつかもしれません。

——他にも、移住者を迎え入れる地域となるために必要だと感じたことはありましたか？

**永山** 元々檜葉町で生活していた町民の方への配慮も、課題だと感じました。

**西崎** ならはみらいの本来の使命は、町民のみなさんと共により良い檜葉町の暮らしをつくり上げることだと考えています。移住促進事業は、その延長線上にあるのではないのでしょうか。町民誰もが「檜葉町で暮らしていてよかった」と思えるまちづくりを進めることが大切だと思います。



——他にも、思い入れのある事業はありますか？

**矢代** 心に残っているのは「檜葉町新たなコミュニティづくり懇話会」という事業です。住民・地元組織・進出企業が自由な意見交換を通じて相互理解を深めることを目指して組織を立ち上げました。やることへの意義は感じていた一方で、成果が見えづらく、進め方に迷っていたため、心に残っています。

**西崎** 家財の運び出しや住居再建に関する相談を受け付ける「生活再建コールセンター事業」は、実施期間が決まっていたため、事業規模を年々縮小していく必要がありました。お断りをしなくてはいけない町民の方にはていねいな説明を心がけましたが、どうしても理解を得られないこともあったため、強く印象に残っています。

——大変だと感じる事業で、モチベーションを保てたのは、なぜだったのでしょうか？

成果の見えづらい事業でも「町民主体のまちづくり」を胸に取り組んだ



2018年6・7月  
『ここなら笑店街』・  
『みんなの交流館ならはCANvas』がオープン



2018年7月  
Jヴィレッジが  
7年4ヵ月ぶりに再開



2019年3月21日  
ならはスマートIC供用開始



2019年4月  
屋内体育施設  
『ならはスカイアリーナ』オープン



2019年4月  
『道の駅ならは』が再オープン



2019年4月  
Jヴィレッジ全面再開

危機管理マニュアルやライフワークバランスの整備にも取り組んだ

**西崎** 「今このサポートを手放すことが、町民主体の檜葉町の実現につながる」と信じていたからです。

**矢代** 私も当時、この事業を誰のために、何のために行うのか、何度も自分に問いかけていました。

——町民主体のまちづくりの成果のひとつが、「ならば百年祭」の誕生ではないかと、他の対談でお伺いしました。

**矢代** 夏祭りを行うと聞いたとき、参加した子ども達が大人になっても「百年祭あるから、お盆は檜葉で過ごそう!」と思ってもらえるような、素敵なお祭りになるといいなと思いました。

**西崎** 若手プレイヤーたちが自発的に「自分たちが大切に思うものを未来に残そう」と立ち上がり、思いに共感する同志を集めて運営するというのです。100年続く祭りを始めようと決まった時には「これは大変なことが始まった」と思ったものです(笑)。

**永山** 檜葉町の各行政区の伝統的な祭りは、担い手不足により復活が難しくなっています。今後、これらの消えゆく祭りと「ならば百年祭」とがうまく共存の仕方を見つけてくれるといいかもしれません。

——事業拡大や移住奨励の流れで、さまざまな背景をもつ職員の方が入ってきたのも、この時期でしょうか。

**石崎** ならばみらいとしても、町民や職員に新しい顔ぶれが増えることへの期待と同時に、新たな配慮も必要になることへの懸念もありました。

**樋田** 檜葉町で震災を経験していない職員が増えるのですから、職員の心の向きをそろえる努力が求められました。特に特命チームである移住チームが孤立してしまわないよう、朝のミーティングで全社的な情報共有を行うなど、注意を払いました。

——成長期の中に、ならばみらいの労働環境にも変化はありましたか？

**樋田** ならばみらいは本来、住民や職員同士の接触が多い場所です。しかしコロナ禍中は、いかに人々を接触させないかという配慮が求められ、危機管理マニュアルの整備を行いました。また、女性の働きやすさ整備にも取り掛かれたのが、成長期の成果です。

**西崎** 私はコロナ禍中に第一子の出産を迎え、感染を避けるためにも産前からリモート勤務を許可してもらいました。そして第二子を出産した際は、職場にベビーベッドを置き、子どもの世話をしながら仕事ができる環境を整えてもらったんです。子育てと仕事を両立したいという私の希望を、最大限に叶えてもらいました。

**矢代** 西崎さんがきっかけとなってより整備された



職場環境は、企業として今後の大きな財産になるはずですよ。

——10年後、ならばみらいはどのようになってほしいと思いますか？

**西崎** 町民のみなさんに納得がいくまで寄り添うためにも、安定した財源は重要です。これからも、常に社会情勢や時代のニーズに関心をもち、新たな事業づくりに果敢にチャレンジし続けます。

**矢代** ならばみらいを頼りにしてくれる町民が増えてほしいです。まちづくり会社と町民の方が手と手を取り合う檜葉町なら、きっとみんなが楽しく暮らせているでしょう。

**樋田** ならばみらいのまちづくりはこれから、復興の次のフェーズへ向かって行くでしょう。誰かの挑戦を助けるために、自ら動ける組織であり続けてほしいです。

**石崎** ならばみらいは、地域づくりに活躍できる人材を育てる場となってほしいと思っています。そして、かつての檜葉町がそうであったように、人も企業も、町に存在するすべてが共存共栄できる地域をつくり続けてくれることを強く期待しています。

**永山** これからもチャレンジ精神をもった組織であってほしいです。若者や子どもがこぞって、「将来の夢はならばみらいの職員になることです!」と言ってくれたらいいですね。

(敬称略)

町民と二人三脚でまちづくりができる 10年後のならばみらいを目指して



2020年6月  
『道の駅ならば』  
物産館がリニューアルオープン



2020年10月  
『檜葉おいも熟成蔵』が完成



2020年12月  
竜田駅旧駅舎の取り壊し



2021年7月  
アユ釣り再開



2021年9月  
檜葉町町制施行65周年



2022年3月  
檜葉北小学校閉校式

# 4

## 拡大期

2022.4 -

2022	5月	シェアハウスと食堂 kashiwaya オープン
	6月30日	NARAHА START-UP PLACE CODOU オープン
	8月20日	第1回ならは百年祭
	8~9月	インターンとして学生3名の受け入れ
	11月27日	首都圏在住の檜葉出身者や縁故者から成る ふるさと福島檜葉会設立
	3月	インターンとして学生1名の受け入れ
2023	4月18日	檜葉町地域活動拠点施設まざらっせオープン
	5月27日	移住者交流会開始
	6月17日	ここなら笑店街 来場者数300万人突破記念イベント
	7月1日	CODOU1周年記念イベント
	7/8~9	エクストリームチャレンジ in 福島ならは ~復興アドベンチャーレース~
	8月19日	第2回ならは百年祭
	11/21~22	活性化協議会柏崎視察研修
2024	5月	移住相談窓口がCODOUから、まざらっせに移転
	8月18日	第3回ならは百年祭

移住定住促進に関連したおよそ10事業を檜葉町役場から受託。スタッフも5名増員し、ならはスタートアップ・プレイス『CODOU』を新設。『まざらっせ』の指定管理事業も受託し、拠点も増えました。

また、町民有志が企画・運営を行う「ならは百年祭」がスタートするなど、一步一步着実に町民主体のまちづくりを進めています。



百年続く祭を目指す「ならは百年祭」



スタジオやキッチンを備える『まざらっせ』



地域に関わりたい方々のシェアハウス『kashiwaya』



『kashiwaya』は、夜は食堂として一般営業もしています

### 拡大期 事業一覧

物販事業 ふたばエイト事業 立地企業親和会事業 空き家・空き地バンク事業 ならはみらい版まちづくりプッチ補助事業  
活性化協議会運営事業 ならはプレイヤーズリスト立ち上げ事業 町民活動サポート事業 人財活用事業 新産業創出  
推進事業促進区域運営・管理事業 町民提案型まちづくり支援事業 ならはアーカイブ事業 地域活動相談窓口事業  
ふるさと案内人事業 ふるさと福島檜葉会事業 地域活性化伴走支援事業 子育て世代つながり創出事業 観光協会

事務委託事業 ならは百年祭事業 CODOUプロジェクト事業 商業施設指定管理事業 交流館指定管理事業 共用施設指定  
管理事業 受託イベント事業 まざらっせ指定管理事業 コンパクトタウン電力事業 笑ふるタウン活性化事業 ふるさと  
納税運営事業 シェアハウス運営事業 お試し住宅運営事業 移住相談窓口連携事業 移住促進情報発信事業 就業推薦制度  
構築事業 まちの人事部運営事業 檜葉魅力体感発信事業 スタートアップ強化事業 移住者向け地域交流事業

[ topics ]

2022.6.30 ~

① CODOU オープン

旧菊池ダンススクールを取得し、ならはみらい初の自己物件を所有。1階を移住相談窓口機能やワーキングスペースとして、2階をスタートアップ企業向けのレンタルオフィスとして整備。  
※現在はスタートアップ企業が主体的に活動する拠点として運用中。



2022 ~

② 移住定住促進事業の拡大

持続可能なまちづくりに向けて、移住定住促進事業を拡大。移住定住サイトの構築や移住相談窓口・お試し住宅の運営などをスタート。町民生活や地域経済に新しい風を取り入れ、新たな化学反応を起こすことで、檜葉町に関わる全ての人たちが誇りをもち続けられる未来を目指しています。



2023.4 ~

③ 檜葉町地域活動拠点施設 まざらっせの指定管理事業開始

町外からの転入者が地域と混ざり合うための施設。愛称の『まざらっせ』は“一緒にまざりましょう”という地域の方言で、踊りや手芸といった町民サークルの活動拠点となっています。



2022 ~

④ ならは百年祭スタート

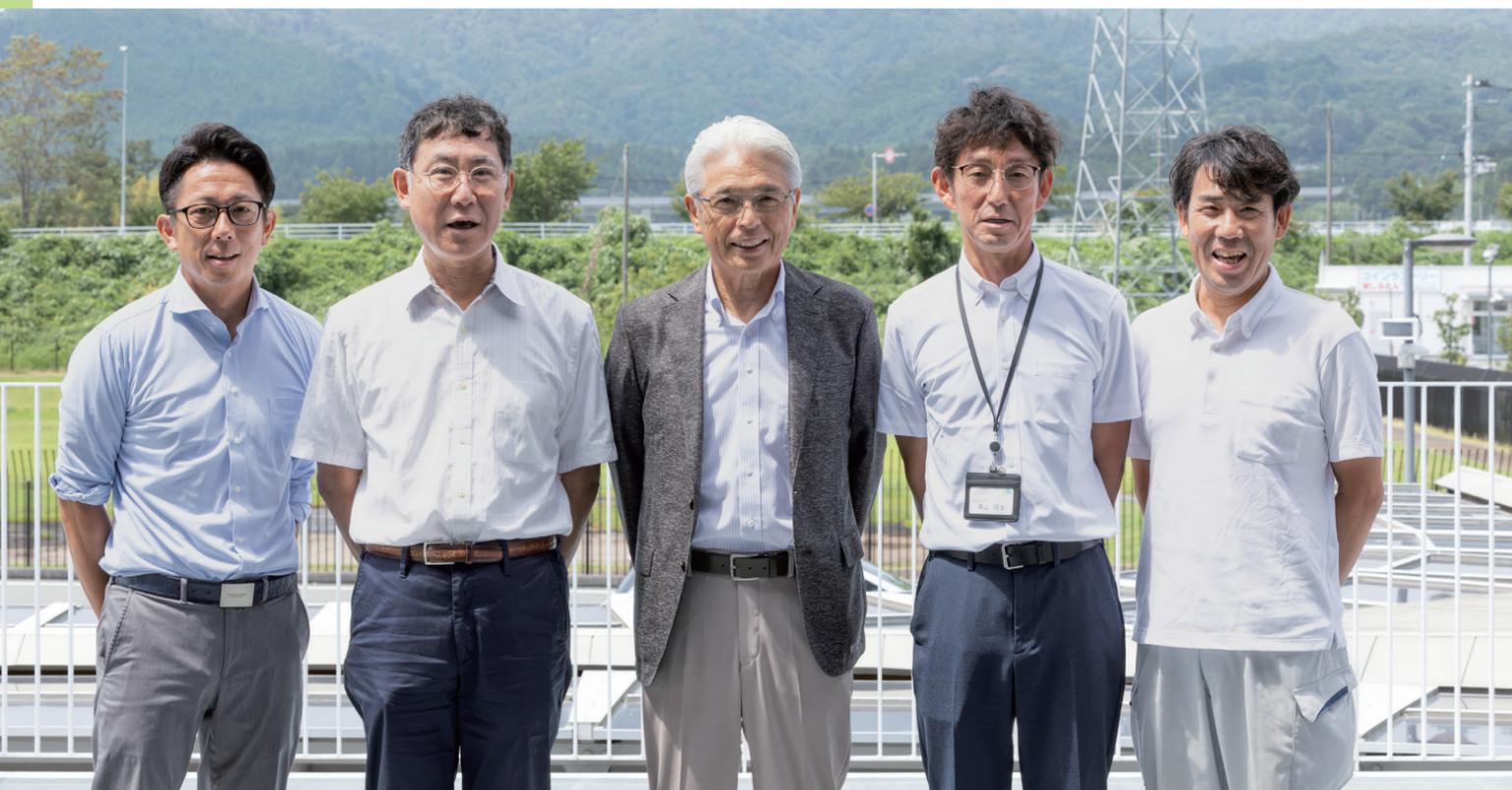
地域に守られ、地域に愛される100年続く祭りを自分達の手でつくろうというお祭り。地域の有志がプロジェクトメンバーとなり、企画立案や運営をしていることが特徴です。



[ interview ]  
2022.4 -

## 10年間の思いを受けて この先10年へつなげる拡大期

拡大期は、拠点となる『CODOU』や『まざらっせ』がオープンし、事業項目も職員数も一挙に増えました。組織としての規模が拡大することで、新たな課題も見え始めます。拡大期の歩みを振り返り、次の10年のために何を取り組んでいくべきか、代表理事と4名の係長に考えを伺いました。



西出 貞善

事務局次長兼総務係係長  
(2018.4～)

大和田 賢司

代表理事  
(2024.6～)

平山 将士

移住促進係係長  
(2018.4～)

木村 英一

企画事業係係長  
(2018.4～)

齋藤 誠

施設管理係係長  
(2024.7～)

### 新たな事業と職員が加わり、拡大期がスタート

——西出さん・平山さん・木村さんは2018年4月入社同期だと伺っています。なぜならはみらいで働こうと思ったのでしょうか。

**西出** 私は、かねてからテレビに映し出される檜葉町の様子に心を痛めていたことと、新しい仕事にチャレンジしたいという思いがあり、エントリーしました。

**平山** 前職はいわき市の地域紙の記者だったのですが、震災当日は県外にいて、震災報道の現場に立つことができませんでした。そのときの無力感が、後悔として心から消えませんでした。復興に関われなかった過去から一歩でも踏み出すために、ならはみらいの求人に応募しました。

**木村** 私は檜葉町で生まれ育ちました。町への思い入れが強い方々は避難指示解除と同時に帰町。「例えライフラインや買い物施設が充分でなくても、町に帰りたい」と言って帰町した方々の姿は忘れられません。檜葉町を愛する人が幸せに暮らせる場所になってほしいと思ったのが、私がまちづくり会社を志したきっかけです。

——大和田さんは2024年6月から代表理事に、齋藤さんは同年7月から入社されたのですね。

**大和田** 私は9年間ならはみらいの理事をつとめた後、代表理事に就任しました。組織としての成長と、歴代職員の頑張る姿を、長く見守ってきた立場です。

**齋藤** 私は派遣職員として、前任者との交代でやってきました。働き始めてからはまだ日が浅いですが、檜葉町の明るさに心惹かれています。

——ならはみらいの拡大期とは、どのような時期でしたか？

**西出** 移住促進事業などの新規事業がスタートし、職員数が大幅に増えていった時期です。一気に事業が拡大したため、ひやひやドキドキでした。

**木村** 檜葉町の政策と連動して受託事業は増えていきました。ならはみらいの業務が多様化していくこと自体が、町の復興が次のフェーズに進んでいる現れだったと捉えています。

**平山** そして私たちが入社した頃は、『みんなの交流館 ならは CANvas』のオープンに向けて職員一同が奔走していた時期でしたね。夜遅くまで議論を重ね、骨組みから徐々にできあがる交流館の姿を見守り……無事にオープニングを迎えられた日に、交流館の多目的広場に寝そべて見上げた光景は、この先もずっと忘れないと思います。

事業は多角化しても根幹は「町民主体のまちづくり」

—ならばみらいの事業は、拡大期になってからのくらい増えたのでしょうか？

**大和田** 現在のならばみらいは、合計 34 項目の事業を行っています。設立当初は 1～2 項目だったのですから、目覚ましい成長です。ここまで事業項目が増えたのは、ならばみらいが行政の期待に応え続けた証だと思います。スピード感のあるプロジェクト遂行力と、住民一人ひとりに寄り添う柔軟性を武器に、ならばみらいは行政のよきパートナーとしてあり続けました。



**西出** 今、町を活気づけてくれている若い方たちが、町に定着してくれるように働きかけていきたいですね。

—事業が増え、方針も変わっていったのでしょうか？

**木村** 事業項目が増えても、“町民主体のまちづくり”を目指していく方針は変わりません。計画がならばみらいの理念に沿っているか、各係のチェックはいつも真剣です。この先もずっと、ならばみらいの芯の部分は変わらないでしょう。



—行政から新たに委託を受けた事業の中に、移住事業がありますね。

**平山** そうですね。ただ、ひと口に移住といっても、“移住者と呼ばれれば終わり”ではありません。移住者が暮らしに満足し、定住してくれるような働きかけまでをセットで行う必要があります。さらに移住者同士をつなぐことも今後取り組みたい課題として見えてきました。

—職場環境として、ならばみらいの雰囲気はどうか？

**齋藤** 過去の檜葉町を知らない私が受け入れてもらえるのか、着任前は不安もありましたが、職員みなさんには親身になってもらっています。先進的なまちづくりの取り組みを行うならばみらいには、日々多くの学びがあります。



**木村** チャレンジ精神を応援する風土も特徴的です。職員が信念をもって取り組む仕事に迷いなく挑戦できるよう、上司や仲間が頼もしくバックアップしてくれます。

**大和田** どの職員も、檜葉町の復興という共通目標を掲げ、時間をかけて議論し、熱意をもって仕事に取り組んできました。苦勞をいとわず、実直に業務をこなす姿には、心からの敬意を表します。

—ならばみらいで働いて、人との出会いやつながりは増えましたか？



**西出** 町に知り合いが増えました。町民の方から、ならばみらいの仕事を褒められたりすると、誇らしい気持ちになります。

**平山** 私も在職期間が長くなり、“ならばみらいの平山さん”と呼ばれるようになりました。檜葉町の一員になれたと感じています。

**木村** 人との絆が深まるほどに、別れのときが早く感じます。ならばみらいに派遣職員として来る方々は、任期を終えると町を去っていきます。しかし元職員のみなさんは、町外の応援者コミュニティ「ならば応援団」に登録して、ふるさと納税やイベントの告知などに協力してくれていますね。かつて檜葉町にフィールドワークで来てくれた学生さんも応援団として活躍しています。

**大和田** 町から離れた後も、檜葉町に愛着をもってくださる方々とのつながりは、ならばみらいの大きな財産です。

ならばみらいを起点に広がる人の輪



2022年4月  
檜葉小学校開校



2022年4月  
『地域学校協働センター』開設



2022年5月  
シェアハウスと食堂  
『kashiwaya』のオープン



2022年7月  
岩沢海水浴場の海開き



2022年12月  
ならばう米 GABA + 販売開始



2023年4月  
檜葉町地域活動拠点施設  
『まごらっせ』オープン

これから取り組みたいのは人づくり

—ならば未来が存続するために、取り組みたい課題はありますか？

**大和田** まちづくりと同時に、人づくりに力を入れていきたいですね。

**平山** マインドの面では、理念を大切にしつつ、変化を恐れずに取り組めることが重要です。また、現在のならば未来には人事異動がなく、職員一人ひとりに仕事が紐づいている状態です。マルチな業務に対応できる人材を育成することも、今後は必要かもしれません。

**西出** 加えて、組織が大きくなるほどに、方向性がバラバラにならないように注意する必要が見えてきました。

**平山** 思いや熱量は、関わりが濃くなるほどに高まっていくものです。震災当時の檜葉町の姿を知らない職員が今後増えていく中、組織として職員の心の向きをそろえる努力は続けていきたいです。

—町民と未来との理想の関係は、どのように考えていますか？

**木村** とある町民の方は、震災前に比べて、自らの力で情報を得る努力をするようになったと言っていました。“町民主体のまちづくり”が実を結んできた

のかもしれませんが、これからも、町民のみなさんを主役に立てる存在でありたいですね。

**大和田** 「ならば百年祭」も、プレイヤーとして地域を盛り上げる若者たちと、裏方として汗をかきながら奔走するならば未来の職員たち、両者があって成り立っています。

**西出** 裏方をつとめる一方で、ならば未来の存在意義を町民の方に理解してもらうことも重要です。

**齋藤** 今日まで築き上げてきたならば未来の存在意義を、次世代の職員が引き継ぎ、発展させてくれば嬉しいです。「ならば百年祭」と同じく、100年先の檜葉町に私たちの仕事が残ることを期待します。

—檜葉町のこれからの課題だと感じていることはありますか？

**平山** 今までつくった施設や事業の中から、次の時代に残すべきものを取捨選択する必要があるでしょう。加えて現在は高齢者が町内の広い範囲に点在しており、より高齢化が進めば新たな問題が出てくると思います。ならば未来と行政が、これからも両輪のような関係性を保ち、まちづくりに取り組んでいけると良いですね。



—これから10年後の檜葉町と未来に、どのようなことを期待していますか？

**平山** ならば未来が今後も、若者が活躍できる組織であるといいですね。「ならば未来がやることだから応援しよう」と町民の方から言ってもらえるように、引き続き謙虚さを忘れずにチームプレイで業務にあたっていきたいです。

**木村** まちづくりに終わりはありません。ひとつのミッションを終えた後も、新たな事業が生まれ、ならば未来は続いていくはず。将来のならば未来の職員が、組織の一員として役割を果たしながら、自身の自己実現も叶えていける未来を期待します。職員の輝く姿は、町の魅力となるはず。先輩職員のみなさんがそうであったように、私も若手がチャレンジできる環境整備につとめていきます。

**齋藤** 現在の檜葉町が笑顔あふれる町となっているのは、今までの職員、発起人、関係者の方々の本気で取り組んだ成果だろうと思います。私自身も笑顔を忘れずに、町民のみなさんと協力してまちづくりに取り組みたいです。

**西出** 人と人をつなぐ価値は、10年後もきっと変わっていません。若い職員が働きやすい環境を維持し、町民・行政・企業、さまざまなものをつなぐ仕事を10年といわずに20年、30年と続けていってくれたらと思います。

**大和田** 今日まで縁の下の力もちとして築き上げたならば未来の良い部分を残し、町民が生きがいをもって暮らせる檜葉町を目指していきたいですね。職員のチャレンジングな姿勢を今後も支えていきます。

(敬称略)

ならば未来は次の10年へ向けて歩み出す



2023年4月  
檜葉町×東京大学総合研究博物館連携ミュージアム  
『大地とまちのタイムライン』オープン



2023年8月  
木戸川駅祭りの開催



2023年8月  
大相撲檜葉場所開催



2023年10月  
天神岬アウトドアフェスティバル  
初開催



2024年6月  
総合グラウンド多目的運動場落成



2024年7月  
インターハイ男子サッカーが  
Jヴィレッジで開催

# staff 2024



- 常勤役員 専務理事 -

永山 光明  
koumei nagayama

事務局長として4年、専務理事として4年3か月、充実した日々を過ごしました。行政から一步離れた一般社団法人の職員として働いたことは、貴重な体験です。もうしばらくすれば、私はならはみらいを離れます。今度はひとりの町民として、町とならはみらいの進化を応援していきたいと思ひます。



- 常勤役員 顧問 -

石崎 芳行  
yoshiyuki ishizaki

町のシンボル・サッカーの聖地「Jヴィレッジ」の建設に関わり、皆様とのお縁をいただいて約30年。海・山・川あり、温泉あり、美味しいモノ・旨い酒あり、何より温かい人柄あり。今や「我がふるさと」に。生涯現役！町の皆様とともに笑顔で暮らす「お節介おじさん」として、これからも頑張っぺ！



- 事務局長 -

猪狩 充弘  
michihiro igari

一時はこの町から人の姿が消えました。それでも「ふるさと楡葉」を想う人々が、この地で生活を再開し歩みを進めています。「ならはみらい」も、そういった方々に育てていただき創立10周年。常に感謝の気持ちを忘れず、希望ある楡葉の未来を創造していくため、職員一丸となり心に響く事業を行なっています。



- 事務局 次長 兼 総務係 係長 -

西出 貞善  
sadayoshi nishide

10年後、きっとならはみらいは、さらに町民のみなさんから愛されるまちづくり会社になっていると思います。私も「ならは愛」を胸に、地域や世の中のためになるようなことにチャレンジしていきたいですね。年をとってもまだまだ働けるよう、体調管理やリスクリングに取り組んでいきたいです。



- 移住促進係 係長 -

平山 将士  
masashi hirayama

これからの10年を見据えると、高齢化と人口減少は避けられないことです。しかし、「不易流行」（いつまでも変わらない本質的なものを大事にしつつ、新しい変化も取り入れること）を胸に、楡葉に住む方・関わってくれる方、お一人おひとりが幸福感を得られる町の在り方を、皆様と一緒に考えていきたいです。



- 企画事業係 係長 -

木村 英一  
eiichi kimura

「震災前後で何が変わった？」この問いに対する多くの声を耳にしてきました。新たに得たこと、受容すること、変わらないこと。それぞれに違った歴史や暮らしがあることを大事にしながら、“やってみたくらいにトライできるまち”として、想いに踏み出せるような仕組みや、応援できる場をつくっていきます。



- 施設管理係 係長 -

齋藤 誠  
makoto saito



- 企画事業係 主任 -

西崎 芽衣  
mei nishizaki



- 総務係 主任 -

木村 由香  
yuka kimura



- 総務係 係員 -

森 雄一朗  
yuichiro mori



- 施設管理係 係員 -

伊藤 紘輝  
hiroki ito



- 企画事業係 係員 -

蓬田 未涼  
misuzu yomogita

ならはみらいで働き始めてまだ日が浅い私ですが、まずは町民のみなさまが主体的な活動ができるよう、しっかり寄り添い伴走していきたいと思っています。檜葉町を訪れた人みんなが笑顔になり、新しい出会いと会話に溢れた活気のある町を体感できるよう、尽力していきたいです。

これまで、これからも、やりたいことは変わりません。「地域主体のまちをつくる」。震災・避難の中で、各々が自分の生きる道と向き合い、多くの選択を重ねて今があります。その選択を悔いることが無いよう、自分たちの手で納得できる未来を創ってほしい。そのために一緒に走り続けたいと思っています。

ならはみらいで働くことで、今まで気づかなかったものが見えるようになりました。そして何より、人の温かさを知ることができました。私が大切にしていることは、地域の声に耳を傾けながら、町民参加型のまちづくりをすること。次の10年も地域と共に成長し、未来ある町を築いていきたいです。

これまでの10年で、ならはみらいが大切にしてきた理念や考え方が、現在の自分自身の価値観の一部になっています。先輩方の意志を引き継ぎながら「住んでいてよかった」「関わっていてよかった」と心の底から感じられるまちになっていくよう、今後もみなさんと一緒に一步一步着実に歩んでいきたいです。

檜葉町のまちづくり会社として、町民の方が快適に暮らしていけるようにサポートしていきたいと考えています。そして、檜葉に来た他地域の方が「またここに来たい!」と思えるように事業に励んでまいります。私が生まれたときから過ごしてきた檜葉町に、少しでも恩返しができるように頑張ります!

地域のみなさんと直接お会いし、会話することを大切にしなが「地域主体・町民主体」のまちづくりに努め、みなさんの檜葉町での暮らしがより良いものになるように励んでいきたいです。ならはみらいの成長とともに、私自身もさらに成長できるように頑張りますので、これからもよろしくお願ひします。



- 施設管理係 係員 -

猪狩 直人  
naoto igari



- 施設管理係 係員 -

金成 尚  
takashi kanari



- 施設管理係 係員 -

小野 敬承  
takatsugu ono

商業・交流施設が皆さまにとって楽しく、安心・安全に過ごせる場所であり続けられるよう、管理担当として尽力してまいります。そして、町民の皆さまと共に歩んでいける催しや、喜びや楽しみを共有できる体験等を提供できるように、知恵を絞って、頑張っていきたいです。自由な発想で仕事を乐しみます！

ならはみらいでお世話になり約2年が経ちました。檜葉町が“暗”から“明”に転換する重要な時期に、ならはみらいの職員として多くの町民の方々と関わったことは、私にとって貴重な経験です。これからも日々「経験」を積み、「知識」を増やし、「センス」を磨き、檜葉町の皆様のために努めてまいります。

若い人たちにも住みやすいと思ってもらえるような町を目指して、ならはみらいの仲間たちと共に歩んでいきたいです。大人から子どもまで、みんなでわいわいできるようなイベントを考え、“交流館”の名前の通りたくさんの方が出会える場となるように、これからも施設の維持管理を頑張ります！



- 移住促進特任チーム リーダー -

山口 世紀子  
sekiko yamaguchi

2022年2月から、ならはみらいの職員として働いています。日々の業務を遂行する中で一番感じるのが、町民の方々の温かさです。この温かい人柄が、次世代のまちづくりにも受け継がれていくのだらうと思います。私もその一助となれるよう、10年後も笑顔あふれるまちづくりを目指していきたいです。



- 移住促進特任チーム -

山口 政義  
masayoshi yamaguchi

私がならはみらいに入社したのは令和6年4月。震災からの復興が進む中、ハード面の復興だけでなく、複雑・多様化するまちづくりに向けた活動を展開していく、過渡期に在籍していると感じています。これからの檜葉町にとって、良い意味で“空気のような存在”になれるよう尽力していきたいです。



- 移住促進特任チーム -

菊地 陽子  
yoko kikuchi

移住を希望される方や町を知らない方に、人の温かさや活気あふれる檜葉町の様子を伝えることが生きがいに なっています。ならはみらい設立10周年という節目に立ち会えたことも、ひとつのご縁だと感じています。今後も、皆さんが築き上げていく魅力あふれる檜葉町のサポートができるよう邁進してまいります！



- 移住促進特任チーム -

松本 祐子  
yuko matsumoto

私自身、日々の子育てを通して檜葉町の良さを実感しています。そんなありのままの町の姿を、多くの人に伝えていきたいというのが私の今の願いです。子どもから高齢者までがまざりあい、賑わう「みらい」になるための業務に取り組み、みなさまが安心して暮らせるまちづくりを目指していきたいと思います。



- 移住促進特任チーム -

渡邊 大河  
taiga watanabe

檜葉町に移住して約1年が経ちました。「ならはみらい」は町民の皆様の理解があったからこそ10年続いてきたのだと、仕事をしながら実感しています。これからも「町民」ひいては「町」のことを第一に考え、ずっと住み続けたいと思ってもらえるような町になるよう、微力ながら貢献していきたいです。

## message

ならはみらいは、檜葉町の避難指示が解除される前年に立ち上がりました。当初は、帰町に向けた生活再建サポート等だった事業内容も、避難指示解除とともにコミュニティ再生から賑わい創出といったように方針転換を図り、まちの復旧・復興の歩みに即した事業を行ってきました。設立当初から継続している事業もあれば、まちの状況に合わせて終了した事業もあり、毎年新規事業が立ち上がり続けています。

「今の檜葉に何があれば住民の方々の生活が充実するか」。これまで在籍した延べ35名のスタッフが、住民のみなさんの顔を思い浮かべながら、まちづくり会社としての役割を全うしようと模索を続けた10年間でした。

次の10年の間に復興創生期間は終了します。避難指示解除からも10年が経過します。檜葉での生活は平穏な日常を着実に取り戻す一方で、まちづくりの課題はより困難に、より複雑なものになっていくでしょう。これまでの方法では対応しきれない状況も訪れるかもしれません。

そんな困難な中でも、私達の基本理念である“きずな・安心・活力”を念頭に、これまで大事にしてきた考えや価値観を常に見つめ直しながら、目まぐるしく変化する檜葉の状況に合った事業展開をしてまいります。そして町民の方々をはじめ、地元企業や行政、町外から檜葉に関わる方々との対話を続けながら、住民一人ひとりが輝ける“町民主体のまちづくり”を目指していきます。スタッフ一人ひとりが着実にレベルアップを図りながら、檜葉で生まれ育った子ども達に「ならはみらいで働きたい！」と思ってもらえるよう、誇りをもって日々を過ごしてまいります。

これからも「どうしたら檜葉の未来につながるか」を常に考えながら進んでいきます。今後10年、20年、さらにその先も、みなさまと一緒に歩んでいけるように。

## 一般社団法人ならはみらい10周年記念誌

発行者 一般社団法人ならはみらい  
〒979-0604 福島県双葉郡檜葉町大字北田字中満 260 番地

発行日 2024年12月

編集 遠藤真耶（合同会社 knot）、藤城光

デザイン 藤城光

写真 鈴木宇宙（対談写真）、鈴木稔蔵（ポートレート、まざらっせ）  
白玉亮次（CANvas）、中島悠二（kashiwaya）、檜葉町（TOPICS 等）

印刷 植田印刷所

協力 橋本華加、檜葉町

10

SINCE 2014